

原子野に復員して

小島 辰雄

本町六丁目

昭和二〇年九月十三日、やっと軍隊から解放され浦上駅に降り立った。浦上駅は終点長崎駅から一つ目の駅である。思えば六月十日、弟と二人、父母・親戚その他大勢の人の見送りのもと、歓呼の聲に送られて浦上駅から乗車、大村の西部第四六部隊に入った。浦上駅を出発する時、駅のまわりは民家や店舗が密集していたのに、今、目の前の景色は立木が一本もない焼野ヶ原となっていた。「爆心地」だと聞かされた松山町を経て浦上天主堂跡まで焼土が続く。東洋一の偉容を誇っていた浦上天主堂も原爆の爆風で破壊され、二基あった鐘楼の一つが、数十メートル下の本原川に尖塔を下にして落下し、川の流れを塞いでいた。尖頭の一箇の重さは十屯もあると言われ、今も原爆の記念として川の中に残されている。

そこを過ぎて我が家に向かう。公道の右側は農地が続いているが、左側は典型的な田園住宅地だ。住宅と庭と畠が混在していて、我が家まで点在する家は焼けてはいないが、爆風で皆押し潰されていた。駅から我が家まで歩く間、人影を見たという

記憶がない。歩き回れる元気な人がいなかったのだろうか。カンカン照りの中、やっと我が家へ辿り着く。我が家も原爆で無残に押し潰されていた。誰か生きていないかと探したが見つからない。隣近所の家も皆押し潰されていて人影はない。一人、生きている人を見つけた。阿部老人だった。我が家の庭先に、親父が私と弟を将来住まわせるため貸家を建てていた。その一軒に住んでいた人だ。阿部さんは原爆の日、少し離れた所へ仕事に行っていた時、原爆にやられたと言う。顔の半分と手にヤケドを負っていたが軽症で済んだ。奥さんと幼い養女を原爆で亡くし、独りで生活していた。阿部さんは土建業だったから我が家の隣接地に掘立小屋を建てて住んでいた。阿部さんから我が家の家族の消息を聞くことができた。

六月十日、軍に入営した我等はあらゆる情報を絶たれていた。長崎への原爆投下のことさえ知らされなかった。まして父母兄弟が原爆で焼き殺されたことなど、何も知るはずがない。阿部さんに聞いて、我が家族の殆どが殺されてしまったことを知っ

た。ただ、長兄の三人の子供が防空壕に逃げ込んだため、命拾いして、兄嫁の実家の森内さん宅で御世話になっていることが分かった。一緒に復員した弟と、とにかく森内さん宅に行くことにした。

森内さん宅は我が家より二キロ以上爆心地から離れていた。原爆の被害としては屋根瓦が少し傷んだ程度で死傷者はなかった。そこに長兄の子供達が厄介になっていた。復員した我等も今夜の寝場所も食事する場所もない。掘立小屋を建てるまで、森内さん宅に置いてもらうことになった。森内さんから我が家の両親兄弟の原爆による死について聞いた。

森内さんの話によると我等が軍隊に入営した後、長崎地方に米軍機の空襲があり、その時の一発が我が家に隣接する公道で爆発、その爆風で我が家の屋根瓦が吹き飛んだ。夏だったから台風が大雨を伴っていつ襲って来るかわからない。密集地に防火帯をつくるため、長崎市でも家を取り壊していた。その疎開瓦を分けてもらって屋根瓦を葺くことになり、瓦を買いに行くことになった。その瓦を仕入れに行く日が八月九日だった。行先は爆心地に近い場所だった。父と兄が瓦を積むため、大八車を引いて行った。長兄は若い時から三菱造船で働いていた。勤務先の造船所に行っていたら、爆心地は造船所から遥かに離れていたから無事だったはずだ。母と兄嫁は大八車で重い瓦を運びに行った親父達を応援しようと途中まで迎えに行った。大八

車を待つ間、八月九日十一時、米軍ボーイング29一機が長崎市を襲った。B29は高空から落下傘を落とした。母達は初めて見る落下傘が珍しいので、アレヨアレヨと落下傘が降りて来るのを見ていた。落下傘の下には原子爆弾がブラ下げられていてB29は原爆の被害圏外へ、サッサと飛び去った。原爆は地上五〇メートルで破裂し物凄い光熱と爆風が地上を襲った。母達は破裂する原爆を直接見てしまったのだ。何千度とも云われる光熱のため、母達の瞳は焼け爛れてしまった。顔も手足も焼かれ両足の皮膚は靴下をズリ下げたように剥けて踵に垂れ下がり、爆風で数メートルも吹き飛ばされたという。

原爆の被害が少なかった森内さんが、自分の娘が嫁いでいる我が家の人々が、瓦を仕入れに行っていることを知っていたので、我等の父母達を探しに行ってくれた。父と長兄の行方は今も分からない。爆心地に近い所で命を落としたらしい。森内さん達は母と兄嫁を爆風で潰された我が家へ連れて来た。防空壕を掘ってあったので、その中で看病してくれたが、母も兄嫁もヤケドがひどく手当もできぬまま翌八月十日息を引きとった。以上が森内さん夫婦から聞いた父母達の最後の模様である。

阿部さんから姪達三人が生き残っていて昭和町の森内さん宅でお世話になっていることを聞いたので、弟と二人森内さん宅へ行くことにした。我が家から昭和町へ歩いて二〇〇メートル位の場所に母の実家がある。会社勤務していた従姉妹いとこが被爆を

免れて無事だった。伯父さんは爆死し、伯父の嫁さんは生きてはいるが火傷がひどいと言うので従姉妹達はその母親に会わせようとしな。原爆の火傷で化物ばけもののような姿になった人達を何人も見ているので無理もないと思った。

この伯父さん宅に立寄った時、一帯は物凄い悪臭がしていた。まるで大量の魚が腐るような臭においがする。臭いの発生源を探してみた。なんと伯父さん宅から三〇メートル位離れた道路の上の土地に人間の死体の山があった。カンカン照りの太陽の下、死体のイタミが凄こわいようで、数十人分の遺体の山だった。

長崎には戦争や災害時の救援組織がなかったのだろうか。組織が働いておれば原爆で傷つき動けなくなった人を救えたはずだ。誰が虫ケラでも捨てるように死体の山を築いたのか。道傍に捨てられた人々には、親兄弟あるいは妻子もあったらうに。この現場を目撃したのは復員直後、日本敗戦から一か月が過ぎていた。真夏の候下、死体の腐敗は激しく、我々の手に負えない。蛆虫が死体に真白く湧いて食い荒らしていた。年末までには死体は皆、白骨になってしまった。

原爆で押し潰された我が家を解体して、掘立小屋を建てるために、森内さん宅から毎日通った。その通り路のそばに死体の山があったから、毎日それを見て歩いたものだ。

掘立小屋が、なんとか出来て姪達と共同生活が始まった。しかし原爆で電柱が皆やられてるので電力は来てない。電灯のな

い生活が半年も続いた。マッチも蠟燭もない生活だった。夜は真暗だからサッサと寝てしま。死体がまだアチコチに残っていたが、お化ばけには一度も出遭っていない。

我等よりも遅れて、あの死体の山のすぐ隣接地にM君が軍隊から帰って来た。家族は皆爆死してるし、帰還を喜んでくれる者はいない。帰還したその日からの寝場所や、食事をどうするかを心配しなくてはならない。次々と原子野に帰って来る復員兵を迎えてくれる準備は何もされていなかった。M君も潰れた家をバラして掘立小屋を建てることに懸命だった。隣接地の死体の山の悪臭には参ったろう。年末近く、M君に道でバツタリ出遭った。M君の話。「夢の中で骸骨たちが踊ってた。その内、その骸骨たちが一斉に俺の首を締めに来た」年末には、あの死体の山は皆白骨になっていた。雨ザラシ、陽ザラシにされた白骨がM君の夢に現れて「いつまでホツとくんだ、何とかしてくれ」と訴えたのさ。翌朝、M君は自宅前の空地に穴を掘って、白骨等を全部埋めたと話していた。

長崎市の原爆被害は市の大部分と知っている人が居るだろうが、被災地は地域の何分の一、被害者も市の人口の何分の一に過ぎない。長崎駅から南の方、県庁や市役所などがある、江戸幕府時代からの旧市街地は無傷だった。だからその住民も何の被害も受けていない。被害地は長崎市の北方地域で、昔から浦上・山里と呼ばれる一帯だった。

長崎の原爆被害で今も疑問に思うのは、被害地への救援活動があったことを誰も話してくれないことだった。傷つき死に行く人をどうして道路側に骨になるまで放置したのか。救援が早ければ助かった人も多かったろうに。原子野に帰還してくる復員兵に、その夜からの宿とか食事を提供することができなかったのだろうか。原爆が落とされた地域は残留放射能があつて、今後七五年間、人も住めない、植物も育たないとマコトシヤカに言いふらす人がいたらしい。その噂が広がったため救援の人も来てくれなかったのだろうか。

私は六月十日入営するまで、学徒動員で東京蒲田の工場で働かされ、何回もB29による大空襲を経験している。一夜にして何万軒という民家が燃やされ、焼け死んだ人も見て来た。国内の大部分の都市が焼夷弾で焼かれて行く。日本の降伏も近いだろうと思うようになった。唯、頑迷で狂気の軍首脳共が、日本全土を焦土と化しても、最後まで闘う決意らしいと聞かされると、何時、自分は米軍に殺されるか分からないと覚悟はしていた。

広島・長崎は日本敗戦を前に非戦闘員だった大部分の人々を巻き込んで大量殺戮の場となった。東京その他の都市の米軍による空襲も、原子爆弾による爆撃も被害者の殆どが非戦闘員だった。アメリカがいかに強弁しても明らかに国際法違反である。人類の歴史が続く限り、原子爆弾を人の上に投下した国として

アメリカは汚名を逃れることはできない。私の両親も叔父叔母兄弟も、あと僅か一週間で日本が降伏するというのに焼き殺されてしまった。生き残った人から見れば「殺され損」だ。私は他の日本人を救うための「人身御供」だと思っている。しかし、こんな悲惨なことは二度とあつてはならないと思っている。

